

教育の不易を問う

本市はこれまで、学力向上への授業改善やいじめ防止への取組を進めてきた。しかし、全国学力学習状況調査で「学校に行くのが楽しいと思うか」は全国平均程度で、「先生はあなたのよいところを認めてくれている

変わる教育委員会

《第575回》

「学ぶ楽しさ日本一」を旗印に ①

兵庫県・南あわじ市教育委員会
教育長 浅井伸行

と思うか」は全国平均より低い。このことを謙虚に受け止める中で、学習する子ども視点に立ち、「学ぶ楽しさ」を追求することこそ目指すべき教育の姿であるという考えのもと、「学ぶ楽しさ日本一」を旗印とした。何かに没頭することを通して、発見や感動が生まれる。そのような授業や体験を様々な場で展開することで、主体的な学びが引き出される。その中で「学ぶ楽しさ」の実感が蓄積され、子ども達は「自立」に向かっていくと考えた。

「学ぶ楽しさ」の姿としては特に次の8つを掲げた。①「わかる」「できる」②「楽しさ」③「困難なことにもチャレンジする楽しさ」④仲間と協働してやりとげる楽

しき⑤ふるさとをよりよく知る楽しさ⑥思いや考えを表現する楽しさ⑦本物にふれる楽しさ⑧夢や志を見つけ、社会に貢献する楽しさ。

「自己肯定感」を高める

「ほめること（励ます・認めるも含む）」こそ「学ぶ楽しさ」の原点であると再確認した。教師や保護者だけでなく、地域の方も含め、様々な場面で多面的に子ども達をほめるとともに、子ども達同士が認め合うような風土をつくっていく必要がある。そして、本人の意欲を引き出し全体的な成長を促していくことで「自己肯定感」を高めることができる。「自己肯定感」は、主体的に学ぼうとする意欲の源といえる。「やればできる」「自分にはいいところがある」「学校が楽しい」「授業がわかる」「国語が好き」など、学びに向かう力につながる気持ちを持ち続けられるようにしていきたい。

「読解力」の向上

新学習指導要領においては、資質・能力が大切なキーワード

になっている。「学ぶ楽しさ」に焦点を当てて、いわゆる認知能力と言われる「見える学力」だけでなく、非認知能力でもある「見えない学力」も付けていくことができると考えている。

中でも最も重要と考えるのは「読解力」である。「読解力」は、知識や技能を活用し、AIに負けない創造性やコミュニケーション能力等を育てていくためにも大切な役割を担う。教科書などの内容を読み取れるのはもちろん、資料から必要なことを読み取ったり、まわりの意見を理解して話し合ったりすることは、認知能力を伸ばす上においても、非認知能力を高める上でも基礎的な能力であると考えられる。

「学ぶ楽しさ日本一」に向けた取組は、前述の2点をベースにした日常の取組や、焦点化を図った教育施策を展開することで、子ども達が将来「なりたい自分になれる」ように後押しし、「夢と志を持ち、ふるさと南あわじの未来を創る人づくり」を目指すものである。

次号より、施策の紹介をする。

変わる教育委員会

《第576回》

「学ぶ楽しさ日本一」を旗印に ②

兵庫県・南あわじ市教育委員会
教育長 浅井伸行

学びを変える「コアカリキュラム」

「地方都市における『教育』は、ここで子どもを育てたいと思える環境にすることでもある」という市長の思いを受け、コアカリキュラムは、産・官・学の壁を越えた連携により実現した。

ねらいは二つある。一つ目は、南あわじ市の未来を担う人材として求める資質能力を育成する市統一のカリキュラムにすること。地域の伝統芸能「淡路人形浄瑠璃」を題材に、重点育成資質・能力を設定し、義務教育9年間で系統的に培う。

二つ目は「学び」、そして「学び方」のモデルとなるようなコアカリキュラムにすること。各学年10時間程度・アクティブラーニング型で単元構成をし、市内の全教員が「コアカリキュラム」を実施することで各教科も含めた日常の授業変革の実現もねらっている。

このコアカリキュラムは、意図的、系統的に資質・能力を育む「社会に開かれた学びのモデル」となる。

コアカリキュラム開発ステップ

- ①市が目指す子ども像の策定
教育指針をもとに、義務教育終了段階の中学3年生の具体的な目指す子ども像を検討する。各校から、管理職と研究主任がペアで参加し、一堂に会して話し合うことで、目指す子ども像や目指すコアカリキュラムの共通理解を図った。
 - ②重点育成資質・能力の設定
具体的な資質・能力を洗い出して分類し、三つに絞り込んだ。各学年で、それぞれの資質・能力を発揮している児童生徒の姿を言語化し、9年間の達成レベルを策定した。ここで重要となるのが、「一貫」と「系統」の視点であり、学年ごとに資質・能力のレベルを話し合い、全体で段階的に育まれていくように調整した。
- また、資質・能力を評価するルーブリックを設定。教師と児童生徒が目指す姿を共有することで評価のクオリティが上がる。
- ③単元一覧表を作成
主に総合的な学習の時間で実施することから、地域のヒト・モノ・コトを各学年で効果的に

探究的な学びとなるような単元設計をし、重なりがないか何度も検討を重ねた。

④各授業の指導案と評価計画、教材を作成

⑤検証授業の実施を通じた改訂
コアカリキュラムは現在も公開授業と分析会を行い、検証を重ね、より良いものへと改訂を重ねている。

社会に開かれた教育課程

新聞や広報紙で地域の人のコアカリキュラムへの理解が広がり淡路人形浄瑠璃の「かしら」の寄贈等、協力の申し出がある。また、子ども達がコアカリキュラムの学びの中で、調べるために「淡路人形座の公演が見たい」、「資料館に行きたい」と言い、親だけでなく祖父母と共に足を運ぶようになる。そして、現状や後継者不足の課題を知り、人形座にお客さんと呼ぶためのアイデアを考え届ける。

子ども達が地元で根付く熱い思いに触れ、大人と課題を共有し、リアルな社会に応えようとするところにコアカリキュラムの神髄がある。

変わる教育委員会

《第577回》

「学ぶ楽しさ日本一」を旗印に ③

兵庫県・南あわじ市教育委員会
教育長 浅井伸行

「学ぶ楽しさから生きる力を育てる 「アフタースクール事業」

高度情報化社会と体験活動

近年、情報技術の急速な発達により、日常生活の利便性などが向上する中、ますます自ら考え判断し、行動する「生きる力」

の必要性が増していると考える。

子ども達にとって、学校は重要な学びの場であるが、地域など開かれた社会生活の場には、発想力、判断力、行動力といった生きる力を育む貴重な体験の機会があふれている。

南あわじ市では、「学ぶ楽しさ日本一」の実現のため、学校と家庭との隙間である放課後の時間に、自ら考え行動することができるよう遊びを通じた多様な体験プログラムを提供し、子ども達が自ら選んで参加することによって、自主性、積極性、コミュニケーション力等が身につくようにする「アフタースクール事業」を実施している。

放課後の学びを楽しく

「アフタースクール事業」で

は、各小学校に通う全ての児童を対象として、放課後に小学校の特別教室や体育館、校庭などを利用して、地域によって様々な体験活動を実施している。

一例として、元奨励会員から本格的な将棋の指し方を教わったり、木工クラフトを特技としている地域住民から木の実や枝を使って自由に工作をしたりするほか、市内でダンス教室を開いている方から発表会などに向けて継続して振付けを教わったり、Jリーグを目指すサッカークラブチームの選手による運動教室を開催したりするなど、体験活動を意識した遊びを提供している。

また、2020年から教育課程に組み込まれたプログラムを体験活動として取り入れたほか、子ども達が自ら課題設定して、それを解決する過程を学べるSTEAM教育を取り入れた体験プログラムも今秋から新たに組み始めた。

それらのプログラムの講師には、地域で活躍をしている人達が「まちの先生」として参画してもらい、子ども達には、遊び

を通じて他者とコミュニケーションをとりながら、対人折衝力を養い、自分が没頭できるものに出会い、地域の伝統や文化、風習に触れ、郷土愛の醸成が自然と養われることを「アフタースクール事業」では意図している。

「学ぶ楽しさ」を生涯学習に

新しい体験や知識に出会う「学ぶ楽しさ」を知っている児童は、学校や社会において困難な状況にあった時も、それを乗り越えられる人として成長できると考えている。

「アフタースクール事業」では、学校のみならず保護者や地域の理解が必要不可欠なものである。幸いにも、南あわじ市では、すべての小学校区ごとに、各種団体が集まる地域づくり協議会が設立されている。

現在は、モデル校として教校区において実施しているが、引き続き、地域づくり協議会と積極的に連携を図り、地域で子どもを見守り、育てる「アフタースクール事業」を展開していきたい。

変わる教育委員会

《第578回》

「学ぶ楽しさ日本一」を旗印に ④

兵庫県・南あわじ市教育委員会
教育長 浅井伸行

南あわじ市の防災教育

本市では、今後発生が予想される南海トラフ地震で震度6強以上の揺れに見舞われる地域が市域の約70%を占め、津波到達時間は最短で43分、最高津波水位は8・1mと想定されている。

防災教育目標

そこで本市では過去の経験を教育に生かしつつ、次の2点を目標に掲げている。

①助け合いやボランティア精神など「共生」の心を育み、人としての生き方・あり方を考える防災教育の推進。

②児童生徒自らが将来的にわたって主体的に本市の防災に関わり、安全・安心なまちづくりに貢献しようとする意識づくり。

防災ジュニアリーダー養成事業

防災教育は、教育活動全体を通して実施しているが、さらに本市では「防災ジュニアリーダー養成事業」を、次に掲げる4つの柱を中心に実施している。これは市内の小中学生代表を合

宿やボランティアに参加させ、リーダーとして行動する機会を提供することで、被災時に自分たちの役割を考え、日頃から主体的に取り組む姿勢を養うためのものである。

1. 防災パートナーシップ協定
市内の内陸部と沿岸部の中学校でペアを組み、緊急時や災害時に相互支援をする「防災パートナーシップ協定」を結んで活動している。

2. 防災Jrリーダー養成合宿
市内の中学生代表を2泊3日の兵庫県教育委員会主催「高校生防災ジュニアリーダー学習会（中学生も参加可）」に参加させ、アクションプランの作成やワークショップ等による非常時の行動や生活について学習する。

3. 東北ボランティア活動
市内の小中学生と近隣の高校生で2泊3日の東北ボランティア活動を実施している。現地では避難所運営の体験談や大川小学校の震災当時の状況、震災以前の様子等のお話を聴き、また東松島市おおい地区を訪問して、地域の方々と交流を深めている。

防災教育推進校で環境防災科のある兵庫県立舞子高等学校が、市内の各小中学校に出向き、高校生による防災出前授業を実施している。授業内容は阪神・淡路大震災を語り継ぐ発表型、その他にもワークショップ型、ゲーム型等がある。

防災は幸せな未来のために

この言葉は東北ボランティア活動の際に出合った言葉である。南海トラフ地震の発生を防ぐことはできないが、しっかり避難することで被害を最小限にとどめることができる。日頃の主体的な取組が、災害時の正確・迅速な判断や行動につながり、命を守ることになる。命があればこそ、その後の役割を果たすことができるのである。それ故に学校教育にかかる期待と責任の大きさを常々再確認している。児童生徒の考え方や行動は、かけた時間の多少に関係なく、防災教育を通して人の生き方に触れることで突如変わる。そのきっかけを生かし「主体性」「共生」の心を育み、幸せな未来を拓く子どもたちを育てたい。